

編集後記

『眞實心』第四十三集が出来上がり、皆様にお届けすることができました。新入生対象の学長講話、および宗教講座五編が収められています。

令和二年度に引き続き、今年度の宗教講座も新型コロナウイルスの影響を受けて動画配信での開催となりました。この二年間、授業は対面とオンラインを何度も繰り返し、課外活動をはじめ多くのイベントも実施方法の変更が相次ぎました。その中であって、あらためて対面の良さを認識し、またオンラインの良いところにも気づき、その両方を操れるようになったのがこの一年のように感じます。

第一回宗教講座「災害多発社会における仏教の慈悲―わたしとあなたのためにより善い関係を求めて―」（公益財団法人 仏教伝道協会 金澤豊氏）では、先生はまず「人と悲しみを悲しむこと」を伝えたいと話され、その実践として災害時の支援活動において、一軒ずつノックして話を「聞くこと」「気持ちを受け取ること」の大切さを話してくださいました。

第二回宗教講座「難病ジストニアが教えてくれたこと ―真宗の学びを通して―」（東

本願寺 真宗大谷派教学研究 難波教行氏) では、先生がジストニアという難病を患う中で出会った病気に対する様々な「とまどった言葉」について語られ、最後に「それぞれがそれぞれのままでいい」ということについて真宗の教えとともに先生の言葉で伝えてくださいました。

第三回宗教講座「あたりまえ は ありがたい」(びわこ医療福祉センター野洲 看護部長 吉田昌佐美氏) では、施設で「ふつうの生活」を支援するの中で「あたりまえ」は奇跡の連続であるということを話されました。利用者さんからの手紙「あなたたちの手が必要です」は感動でした。

第四回宗教講座「共生社会を目指して —失語症会話パートナーの寄り添い—」(元京都光華女子大学健康科学部医療福祉学科言語聴覚専攻教授 瀧澤透氏) では、失語症が目に見えない障害のためバリアフリー化が進まない現状の中で、「会話パートナー」という支援が不可欠であること、また多様性のある人々が暮らす共生社会での「共助」の基本に「利他」の精神があることを教えてくださいました。

第五回宗教講座「どうして私たちだけがこんな目にあうの? —感染症とともに生きる—」(西九州大学 健康栄養学部(公衆衛生学) 教授 横尾美智代氏) では、先生は最初

に「ぜひ一生懸命聞いてください。私も一生懸命しゃべります」とおっしゃいました。もうこれだけで素敵です。感染症に対する考え方について、ネパールでの具体例や日本での子宮頸がんのワクチンの例を挙げて、「いろいろな病原体と共存する時代」について一緒に考えようと提案くださいました。

編集後記を書くにあたり、あらためて宗教講座を振り返り、講師の先生方が学生の皆さんに伝えたいと思っておられること、またその熱量を強く感じました。それでいてその思いをコンパクトにまとめてくださっています。昨今、おうち時間と呼ばれている家で過ごす時間があるこの時期に、ぜひとももう一度じっくり読み返していただきたいです。

最後になりましたが、ご講話をいただきました学長先生、講師の先生方、そして動画撮影や編集にご尽力いただきました先生方ならびに関係者の方々に心より感謝申し上げます。

(編集委員会)